御茶ノ水子ども医療総合ネットワークからの報告
（注（　）内は実際の年報には記載されません。）

（病院名：）川口市立医療センター
（科名：）新生児集中治療科
（執筆者の役職：）部長
（執筆者の氏名：）箕面崎 至宏

（冒頭のメッセージ）
新生児科は、日々の診療活動が、子ども達の未来にダイレクトに繋がっている
（学会の認定施設）
　日本周産期・新生児医学会　新生児研修基幹施設
1. 病院概要
　川口市は 2018 年 4 月に中核市となりました。それと共に川口市立医療センターは地域医療支援病院となり、埼玉県南部地域の基幹災害医療センターとして、診療科数 17 科 539 床を有し、地域の基幹病院としてプライマリ・ケアから三次救命救急、高度専門医療まで広範な医療を展開しています。新生児集中治療科は、埼玉県南東部をカバーする地域周産期母子医療センター（産科 30 床、NICU30 床：NICU 加算 9 床+GCU21 床）の NICU 部門として診療を行っています。
2. 科の特徴
入院
　当院産科は、常勤 6 名体制に戻り、周産期産科専門医も 2 名となっています。週 1 回産科新生児科カンファランスを持っています。県内２つの総合周産期センターと役割分担しながら活動をしています。しかし、当周産期センター担当の埼玉県南東部地域では、戸田中央産院、永井マザーズホスピタルといった年間 1000 分娩以上規模の産科施設や、様々な公的病院の産科を受け持っており、超早産の切迫早産、前期破水などの母体搬送受け入れ、妊娠高血圧症候群、甲状腺機能異常などの合併症妊娠、多胎（双胎、品胎）妊娠などの外来紹介は、引きもきらず依頼があります。平成 29 年は分娩数 514、多胎 28、緊急母体搬送 77 でした。また、在胎 35 週以上で出生体重 2000～2500ｇの late preterm の低出生体重児であっても、

呼吸循環血糖などが落ち着いていれば、当科管理の下、産科病棟で母児同室を行っています。平成 29 年度のその数は 89 名でした。また、重症児の出産が予想される場合、新生児科医が両親に対し prenatal visit を行っています。

新生児集中治療科（NICU・GCU 病棟）への入院は 236 名、母体搬送からの入院 66 名、極低出生体重児は 33 名（超低出生体重児 11 名）でした。挿管人工呼吸管理 38 名、全身麻酔手術症例は 17 例（新生児症例 6 名）、眼科光凝固術 1 例、死亡退院 1 名(剖検 1 例)でした。

小児科循環器、内分泌なども併診に来棟され、眼科眼底検査回診や整形外科医、理学療法士の回診もあります。

外来

当科を退院した児のフォローアップ外来を月・水・金の午後行っています。極低出生体重児の学齢期までのフォロー、在宅医療児の支援、母乳育児支援などを行っています。気管切開、在宅酸素、在宅人工換気などの在宅医療を必要とする患者の増加もあり、小児科と密接な連携のもと、診療を行っています。また、発達評価や心理面でのフォローを臨床心理士 3 名にお願いしています。

3. スタッフ

スタッフは常勤医 6 名（うち当直オンコール免除 3 名）、特別研修医（後期研修医）3 名で、加えて非常勤 1 名（週 4 日勤務）、２名（週１日）です。防衛医大や埼玉民医連、地域医療振興協会などから、不定期に短期長期の研修派遣があります。その他非常勤臨床心理士 3 名です。

4. 教育・研修の特色

当科は日本周産期・新生児医学会の新生児研修基幹施設に認定されており、今年当科で研修した医師のうち周産期（新生児）専門医試験を 4 名が受験予定、3 名の医師が研修中です。また当科出身の周産期（新生児）専門医も、４名（奥、箕面崎、滝、石黒）となり、各施設で活躍中です。

当科では、小児科医として必要な正常新生児の管理から最重症児の呼吸循環栄養管理まで、幅広く研修することができます。また、小児外科、脳神経外科、形成外科などとの連携において、新生児外科疾患の術前術後管理を研修することも可能です。循環器外科疾患に関しては、小児循環器医の指導の下、診断、急性期の治療を開始し、stabilize 後に循環器専門施設（榊原記念病院、県立小児医療センターなど）へ搬送しています。

INTACT(周産期医療の質と安全の向上のための研究)に参加しており、治療方法などの見直し・検討・改善を行っています。

また、東京医科歯科大、防衛医大、筑波大などの医学生実習、その他埼玉県立大学、川口市立看護専門学校などの看護助産学生実習などの研修指導教育に協力しています。

5. メッセージ

”あらぁ！みのさき先生じゃないですか、、、。”　先日家族で回転寿司屋に行き、順番待ちをしていたときに、突然声をかけられた。懐かしい御両親と少年から青年になりかけの男の子の顔が並んでいた。在宅酸素で退院した元25週超低出生体重児の一家であった。もう、高校2年生になって、サッカー部で夜8時まで駆け回っているとのこと。日に焼けた顔は、やや小柄ながらも元気一杯で、にこにこ話をしてくれた。家内も当時外来でSpO2測定をしていた関係で、お母さんとは顔見知りで、当時の話に華が咲いた。”来年は受験で、埼玉大学へ行って教師になりたいと思っているんだけど、数学がちょっと壊滅的で、もうちょっと頑張んないと、、、。”　将来の夢を語る彼の眼は、希望でキラキラしていた。

我々小児科、新生児科医は、日々の診療活動が、子ども達の未来にダイレクトに繋がっている。その責任は非常に重いものの、また、こんなにやりがいのある仕事もないのではないかと思う。

”大学に入ったらNICUへ遊びに行きますね。”と言って彼は別れていった。

6. 業績など

忙しい業務と並行しながら、論文掲載は、埼玉医学会雑誌2編、学会発表は、全国学会10題、埼玉地方会など7題発表しました。

2017年度スタッフ紹介　〇小児科専門医　＊医局外

氏　名	身分	卒業年	専門領域	学会役職など
〇箕面崎 至宏	部長	平成元年	新生児	小児科専門医、周産期専門医・指導医、小児科学会埼玉地方会理事、日本新生児成育医学会評議員、日本SIDS･乳幼児突然死予防学会評議員、NCPRインストラクター
〇森丘千夏子	医長	平成13年	新生児	小児科専門医、IBCLC、NCPRインストラクター
〇佐藤 千穂＊	医長	平成17年	新生児	小児科専門医
〇伊藤 一之		平成21年	新生児	小児科専門医、NCPRインストラクター
〇勝碕 静香		平成21年	新生児	小児科専門医
〇早田 茉莉		平成22年	新生児	小児科専門医、IBCLC、NCPRインストラクター
〇宮原　宏幸		平成24年	新生児	小児科専門医
野口　優輔		平成25年	新生児	NCPRインストラクター
齋藤　洋子		平成25年	内分泌	
下山　輝義		平成26年	小児科一般	

卒後3年目以上の医師のみ掲載
^